

それは夕食中突然起こりました。妹が首をかきむしるように苦しみ出したのです。私たちの心配の声も届かない様子で、みるみるうちに顔と全身まで真っ赤に腫れ上がりました。慌てふためき母はさすがのような思いで救急車を呼び、妹は救急病院に運ばれ適切な治療を受けることができました。診断は食物アレルギーによるアナフィラキシーショックでした。病院に到着した時は、内部まで腫れ上がった気道はふさがれかけ、呼吸困難に陥っていて、後数分到着が遅れていたら命の危険があったそうです。医師からは「今後もこのような発作が起これば迷わずすぐに救急車を呼んで下さい。」「必ずですよ。」と念を押され、三十分の間で生死を分けることを説明されました。

日本では救急車を呼んでもお金はかかりません。税金が使われているからです。これは特別なことなのです。救急車は妹のような急病から、脳梗塞や心臓病のような一分一秒を争う沢山の人のために命綱です。しかし、アメリカではこの救急車を呼ぶのに十五万円前後もの費用がかかるそうです。もし日本でも同じ費用がかかれば、呼ぶのをためらいこの命綱を断ち切られてしまう人も出てくるでしょう。妹ももしあの時すぐに救急車を呼べていなければ……。その命は尽き、残された私たち家族の人生をも大きく変えていたに違いありません。妹の命は紛れもなく、税金とそれを納めてくれた人たちのお陰で救われたのです。日本の税金制度がどれだけの恩恵を私たちに与えてくれているかを痛感しました。

また大阪市には「子ども医療費助成制度」があり、ここにも税金が使われ〇～十八歳までの子どもが少ない費用で病院にかかれます。いつも病院の会計の時決まって「助かるわ。」と言っていた母のその言葉の意味が、今はよく分かります。

持病を持つ祖母が不安を抱く現在のコロナ禍では、無料で四度にもわたるワクチンが受けられ、特別定額給付金も交付されました。この突然起こった国難においても税金が重要な役割を果たし、沢山の人を助けています。

皆が納めた税金は、今日も日本中を巡り、尊い命を救い、必要とする皆の役に立っています。皆で皆を守り、助ける社会は素晴らしいし、誇らしいです。税金の意義を実感した今、税金とはむしろ、「納めなければならないもの」ではなく、「納めるべきもの」であると強く感じました。

少子高齢化や自然災害など、この先様々な問題が見えますが、この税金がこれからの社会に救いをもたらしてくれることは間違いありません。私たちの未来のためにも、一人一人が税金に対し正しい知識を持ち、誰もが支え助け合えるこの社会をしっかりとつないでいかなければならないのです。

妹が救われたように、納税という形で私も一人でも多くの誰かを助け、社会に貢献できる一員になりたい。そう心より願います。